

神道流の“戦後”

元々、戦後日本において古流武術の価値が正当に認められたことは殆どなく、現在の日本人の意識が「戦後」である限りこれから先も望みは薄い。

以下、昭和35年、香取神道流が千葉県の指定無形文化財になった。その時のエピソードである。

「当時、香取神道流の技術的道統は、香取の地に留まった林弥左衛門先生と東京にて教伝を試みた椎名市蔵先生という二つの流れを作っていました（これらの内、前者の道統は大竹師範へ、後者は杉野嘉男師範から杉野至寛師範へと受け継がれる）。それぞれが何とかして古流武術の復権を考えた末の選択だったでしょう」と当時を振り返る大竹利典師範。

そして前者の、香取の地に地盤を築こうとした林弥左衛門師範等が最重要の課題としたのが、香取神道流を県の無形文化財として認めさせることであった。

「しかし当時の古流武術に対する風当たりは今以上に厳しいもので、『香取神道流？ 古流武術？ それは剣道より強いのか？ それなら実際に立ち会わせてみよう』と

いのが県の答えでした」

結局、相手の剣道若手五段に対するのは、当時の神道流における年齢、実力、経験を考慮して自然「大竹しかないだろう」ということになった。他流試合を厳禁としてきた香取神道流では、600年の歴史上初めてのことである。

「まず最初に考えたことは、これはエライ事になった、ということでした。もし負けた場合は、とても流祖以下先達に顔向けが出来ない。そうなると……本心に腹を切るしかない。そんな心持ちでした」負ければ「腹を切る」とは裏を返せば絶対に負けられないということである。

「色々対策は考えました。まず相手が防具を着けるのは良いが、自分は素面素小手、木刀は短めで軽い物の方が良いだろう。ということとで知り合いに頼んで特注の木刀を造ってもらいました。そして毎晩立木に向かって打ち込みを行っていたわけです」

結局、この立合は林弥左衛門師範の絶妙な調停によって事なきを得る。県の役人の間にも顔が利いた林師範は「うちの若い門人が生きるか死ぬかと毎晩木刀を振り回しているが、これでは死にはしないまでも、どちらかが大怪我を

“孝”が支えた伝承のシステム。

遠く室町の時代より途切れることなく伝承されてきた
日本最古の古流剣術、天真正伝香取神道流の近代史を読む――。

文・本誌編集部 text “HIDEN”

今回紹介したエピソードの時に使われた
大竹師範の木刀

することに。あなた達はそこまでの覚悟があるのですか」と県の役人に持ちかけたらしい。

その直後、天真正伝香取神道流は、古流武術では日本で最初の指定無形文化財となった。

古流武術と“孝”

さて、この時に調停役をした香取神道流・林弥左衛門家清師範（昭和39年死去）について、ここで少し触れておきたい。

林師範は初め林作一郎師範に神道流を学ぶが、その後、東京で會計の仕事に就く。戦前の話である。持ち前の努力によって会社での信頼を得て役職も上がっていったが、そこにある種の違和感を感じていた林師範は、結局、香取の地に戻り、農業を営みながら神道流の稽古に没頭する。それは、仕事が終わった後自転車で数時間の道のりを通い、稽古の後、また数時間道のりを行くという非常に厳しいものであった。

大竹師範は師・林弥左衛門師範についてこう語る。

「非常に温厚な人柄で多くの門人に慕われていました。やはり自分がそれだけの苦勞をしたからこそ、人の痛みが分かったのでしょう」

そして戦後の困難期にこの林師範と共に香取神道流を支えてきたのが第二十代・飯笹修理亮快貞宗家である。香取神道流では、代々宗家は飯笹家が継いでおり、飯笹快貞宗家は現在も香取神宮近くに居を構え、300年の歴史を伝える香取神道流の本部道場を管理しておられる。

「結局、香取神道流は多くの先達の、そして現宗家の努力があったからこそ今に残ることができたのです。私は本心に香取神道流に出会えて良かった。この“孝”の精神が私を支えてくれたのです。

あの時もそうです。数え切れないほど多くの人々が神道流を残してきた。それ程の価値あるものを背負う責任、義務を感じられたことは私の一生にとって非常に幸せでした。神道流に出会い、神道流と共に生きてこられたからこそ私は自分の人生に誇りが持てる。

そんな私が今の日本人に望むことは、何でも良い、何かに向かって一生懸命になり、誇りある悔いのない人生を歩んでもらいたい、ということですよ」

古流武術は日本文化の根幹を成す「大黒柱」である、と言ったなら多くの日本人の方々はどのよう感じられるだろうか。⊕